安城市亀塚遺跡出土の竪櫛

▲亀塚遺跡の河川跡から出土した弥生時代末期～古墳時代初頭の竪櫛

1. 亀塚遺跡とは？

愛知県安城市の鹿乗川沿いにあり、**鹿乗川流域遺跡群**※1の北群のひとつです。

安城市による 1977 年の発掘調査で出土した**人面文壺形土器**※2は重要文化財に指定されていますが、近年でも愛知県埋蔵文化財センターによる調査が行われ、銅で作られた矢じりや赤彩された木製の盾など貴重な遺物も出土しています。

今年度の調査では、弥生時代末期～古墳時代初頭の河川の跡や、**方形周溝墓**※3、竪穴建物跡などが見つかっています。

河川跡からは土器が大量に出土しているほか、地下水の湧き出る層を掘り込んでいることから、**木製品も良好な状態で保存されて残っている**※4ことが判明しています。

※1　碧海台地東側、南北約 4km の範囲に広がる弥生時代～戦国時代までの 20 以上の遺跡をこう呼びます。

※2　壺の外側に入れ墨をした人の顔を描いたもので、亀塚遺跡のものにある細かい表現は全国でも珍しいものです。

※3　溝を掘って四角形の区画を作り、その中に死者を埋葬する、弥生時代に特徴的なお墓の一種です。

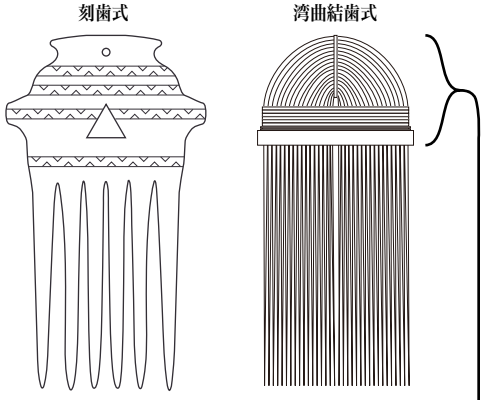
※4　地下で水に浸かっていることで、低酸素状態となって微生物の働きが抑制され、木の劣化が抑えられます。

2. 竪櫛とは？

縄文時代に出現し、古墳時代には**副葬品**※1にも用いられた、縦に長い櫛を指します。髪をとかすのではなく、髪留めに使ったと推定されています。飛鳥時代以降は**横櫛**※2が広く使われるようになり、姿を消していきました。

古墳時代以前の竪櫛は、櫛歯を糸などで結束する「結歯式」と、板材から櫛を削り出す「刻歯式」に分類されます。

「結歯式」はさらに、真っ直ぐな櫛歯を並べて結束する「単純結歯式」と、U字状に曲げた櫛歯を結束する「湾曲結歯式」に分類されます。

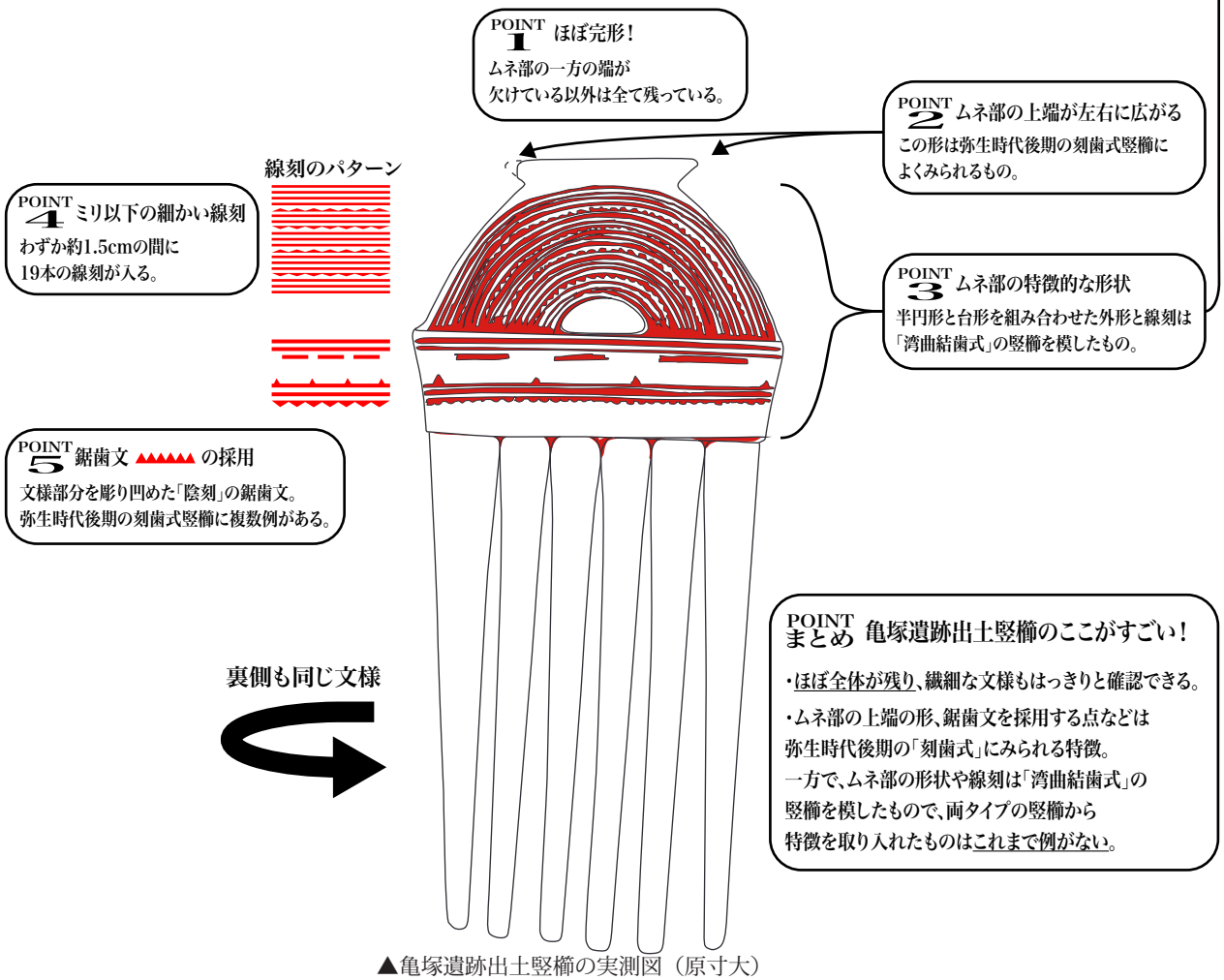


▲竪櫛の模式図

3. 亀塚遺跡出土竪櫛の特徴

亀塚遺跡の竪櫛は一枚の板材から削り出した「刻歯式」です。長さは約 11cm、幅は約 5cm、厚さは約 0.6cm で、中央に透かし孔があり、6 本の長い櫛歯を持ちます。

ムネ部※3には細かい**線刻**※4がなされ、その中には**鋸歯文**※5もあります。線刻部分には赤彩もされており、科学分析によって**水銀朱**※6が用いられていることも確認されました。



▲亀塚遺跡出土竪櫛の実測図（原寸大）

※1　埋葬される死者へのお供えの品々で、土器、剣や鎧といった武器類、勾玉や管玉といった装身具など、多種多様です。

※2　現在よく見られるような、櫛歯が短くて多く、髪をとかすことを目的とした、全体が横に長い櫛を指します。

※3　竪櫛の櫛歯とは反対の側、髪に差したときに外に現れる部分で、古墳時代には漆塗りなどもされます。

※4　鋭い道具を使って線を彫り、模様を描き出すことを言います。石器、土器、木製品など様々なものに行われます。

※5　ノコギリの歯のようなギザギザの文様で、表現方法は様々ですが、土器、青銅器、瓦など多くのものに見られます。

※6　辰砂（硫化水銀）から作られる顔料です。ベンガラ（酸化鉄）と共に、古くから赤色顔料として使われました。